

小清水漸論

——「作業台」シリーズと「水浮器」シリーズの関連を中心に

秋丸知貴（滋賀医科大学）

本発表は、もの派の彫刻家小清水漸（1944-）の芸術活動、特に 1974 年から始まる「作業台」シリーズと 1975 年から始まる「水浮器」シリーズの関連を集中的に考察する。

小清水は、もの派の中心作家であるにもかかわらず作品が難解な上に自作を解説することが少ないので、これまで峯村敏明や北澤憲昭等の少数の論者を除いて本格的な研究論文は少なかった。特に、「作業台」シリーズ以後の作品は造形要素も多く、素朴な反造形主義とされるもの派の通念と異なるので研究に取り上げられること自体が少なかった。

しかし、2010 年に稲賀繁美が「作業台に座る石たちは、なにを語るか」で、小清水の「作業台」シリーズがジャック・デリダの『絵画における真理』（1978 年）における本体（エルゴン）と装飾（パレルゴン）の関係の脱構築よりも数年早いことを指摘したことで改めてその重要性が注目されている。これを受けて、2015 年以来発表者は、小清水の「作業台」シリーズに関する展覧会を 2 回キュレーションし、小清水とインタビュー・対談・シンポジウムを重ね、本年 11 月 8 日には「もの派の淵源」展国際フォーラム（上海 AAEF アートセンター）で小清水と公開対談も行った。これらの継続的かつ最新の研究成果に基づき、本発表では「作業台」シリーズとそれに深く関連する「水浮器」シリーズの制作過程を詳細に解明する。

2019 年に拙稿「Qui sommes-nous? ——もの派・小清水漸の 1966 年から 1970 年の芸術活動の考察」で示したように、1968 年に小清水は《位相 - 大地》により芸術表現における観念性から実在性への転換を経験した。また、2019 年に拙稿「現代日本美術における土着性——もの派・小清水漸の《垂線》（1969 年）から《表面から表面へ - モニュメンタリティー》（1974 年）への展開を中心に」で明らかにしたように、そうした《位相 - 大地》がもたらした作者の主観的構想以上の物体の客観的性質の強調は、小清水に西洋彫刻とは異なる、素材の性質や自然との関係を重視する日本の伝統的な造形的感受性を開眼させた。さらに、2021 年に拙稿「現代日本彫刻における土着性——もの派・小清水漸の《a tetrahedron - 鋳鉄》（1974 年）から『作業台』シリーズへの展開を中心に」で論じたように、そうしたもの派としての経験から、小清水は西洋の人間中心主義的な彫刻観とは異なる、時間的にも空間的にも人為的な完結を保留する自然に開かれた「作業台」シリーズを生み出したのである。

これに並行して、同時期に同様の脱西洋志向から小清水が取り組んだのが「水浮器」シリーズである。この陶製の器に水を張り物体を浮かべることが基調とする連作もまた、石膏や青銅による具体的な人体像を至上とする西洋彫刻を相対化する試みであり、彫刻の中に日本の伝統的な工芸的感受性を生かすものであった。そして、時に組み合わせられる「作業台」シリーズと「水浮器」シリーズは、ただ単に彫刻において西洋と東洋を対立させるのではなく、互いに補い合うより普遍的な方向性を示唆するところに現代的な意義があると指摘できる。